

Pとアイドルたちの日常

特撮大好きマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

担当Pと担当アイドルとの日常を描いた物語

目 次

五十嵐響子との日常	1				1
五十嵐響子との日常	2				5
優しいプロデューサーとムーンナイト					
キヤツト					
ビール好きプロデューサーと幸福のひと とき				8	
頑張り屋プロデューサーとフォスメー ティス			12		
	16				

五十嵐響子との日常 1

とある日の朝……

少女「あつ、おはようございますっ！」

少女は俺に挨拶をしてきた。

P「おはようございます……」

俺も挨拶を返した。

まさか女子高生に挨拶をされるとは思いにもよらなかつた。

しかもよく見るととてもかわいい。

少女「お仕事ですか？ いつてらつしやい！」

P「行つてきます……： なんだか、夫婦みたいだな」

とある日

少女「おはようございます！ あ、今日は夜から雨らしいですから、折りたたみ傘持つていつた方がいいですよっ！」

P「これはどうもご親切に」

少女に言われ折りたたみ傘を持つてくことにした、その夜、少女が言つた通り雨が

降った。

P「いや～降られちゃつたな……でも、あの子のおかげで濡れることなく帰れそうだ今度会つたら、お礼を言わないとな」

とある日

少女「よいしょ…………よいしょっ！」

少女がゴミ袋を運んでいた。あの時のお礼に手伝うこととした。

P「ゴミ出し手伝うよ」

少女「あっ、すみません！ゴミ出し手伝つてもらつちやつて！昨日、弟たちの部屋を掃除したら、袋がたくさんになつちやつて…………！」

P「そうなのかな…………」

少女「これ、あと10袋はあるんですけど…………。手伝つてもらつちやつてもいいですか？」

P「ああ！もちろんいいよ！」

少女のゴミ出しを手伝つた。いくら分担して運んでいとはいえ、さすがに10袋はきつかつた。

数分後

少女「ふう…………ありがとうございました！助かつちやいましたっ♪」

P 「それならよかつたよ！それでは……」

少女「あつ、ちよつと待つてくださいっ！」

そう言うと少女は俺の曲がつてているネクタイを直した。本当の夫婦みたいなやりとりに22歳独身の俺は緊張してしまった。

少女「……よしつと♪すみません、おせつかいで！うちの父もそうなんです！いつつもネクタイ曲がつてて……あつ、こんなお話ししてたら、遅刻しちゃいますよねつ！それではっ！」

少女は立ち去ろうとする。しかし俺は「ここで彼女をスカウトしとかないときつと後悔する」というプロデューサーの勘が働いた。

P 「ちよつと待つて、君アイドルにならないかい？」

少女「……ええっ？ アイドルですか？ ど、どういうことですか？」

P 「そういえば、自己紹介していなかつたね私は美城プロダクションという事務所でプロデューサーをしているものです。ここには長期の撮影ロケに来てるんです」

少女「引つ越してきたご近所さんだと思つたら、芸能プロダクションのプロデューサー、だつたんですか……」長期の撮影ロケに来てたから、この間からお会いするようになつたんですね！でも私、アイドルなんて、よく知らないんですけど……だつて、私の得意なことといえば、掃除に洗濯、お料理も、家事ならなんでも、ですけど……

でも、それくらいですよ?」

それを聞いた俺はアイドルとしてのスカウトではなく、自分の嫁としてスカウトしたくなつた。でも、我慢して……。

P 「君ならできる」（よく我慢した俺……）

少女「そ、ですか？で、できるかわからんないですけど……じゃあ、頑張ります！」でも、もう少し詳しくお話を聞かせてもらつても、いいですか？」

P 「ああ！もちろんさ！」

これがご家庭アイドル「五十嵐響子」との出会いだ。

五十嵐響子との日常2

五十嵐響子をスカウトしてから数日がたつた、そして今日はアイドル・五十嵐響子の初レッスンだ。

初レッスンを終えた響子が俺のもとへ来た。

響子「ふう……あっ、プロデューサーさん、お疲れさまです！お待たせしました！」

響子P「初レッスンはどうだった？」

俺が初レッスンの感想をたずねると響子は

響子「うーん……全然うまくいかなくつて、驚いたやいました！ダンスレッスン、お尻から転んじやつて。私、初めてすることは大体うまくいかないんですよ。」

響子にもそんな一面があるんだなと一人で勝手に納得していると響子が続けて

響子「それにすごくきつくて、びっくりしました！走り込みとか腹筋とか、トレーニングつて感じでつ！もう、くたくたになっちゃいました……」

響子P「まあ……あの聖さんのトレーニングだからな……」

響子「アイドルって可愛い衣装を着て、ステージで歌つたり踊つたりして、キラキラして。そんなイメージだつたんですけど……アイドルがこんな大変な思いをしてる

なんて、思つてなくて！」

響子P 「がつかりした？」

俺が響子に聞くと響子は首を横にふりながら

響子 「ううんつ、そんなことありません！……

むしろ逆かも」

響子P 「むしろ逆？ どういうことだ？」

響子 「私、アイドルになつて、ステージで歌う姿なんて、想像できなかつたんです。でも、レッスンをしてみて……。最初はあんまりうまくできなかつたけど、終わりには、ちよつとだけステップを踏めたんです。このまま続けたら、だんだんできるようになるのかなつて。ほら、お料理をするときだつて、最初からお魚を三枚にさばけたりしないですよね」

響子P 「むしろできたたらすごいけどな……」

響子 「まずはジャガイモとか、ニンジンの皮むきから慣れていこうかなつて、そんなことを考えてました！」

響子P 「楽しみだ」

響子 「プロデューサーさんもそう思つてくれてるんですね！ 嬉しいですっ♪

嬉しそうな顔をしている響子を見ていてやつぱりアイドルにして良かつたなと思つたとしてかわいいなと思つた。

そんなことを考へていると響子は

響子「たくさんレッスンして、いつかは、美味しい響子になつてみせますから、樂しみに待つてくださいね♪プロデューサーさん♪」

響子P「お、おう……樂しみに待つことにするよ」

響子「はい♪」

一瞬、危ない発言に聞こえた俺は耳鼻科に行くべきなのだろうか……。

優しいプロデューサーとムーンナイトキャット

みく「ふー…… Pチャン、お疲れさまー……」

P「うん、お疲れさま」

みく「今日のお仕事はちょっとハードだつた。監督さんにも、スタッフさんにも迷惑かけちゃつたし。」

みくは仕事で失敗して落ち込んでいる。

みく「終了時間も押しちゃつて……みんなお疲れモードだつたかな。みくがもつと頑張れたらよかつたのに……ごめんね、Pチャン。」

P「ううん、みくが謝ることじやないさ」

みく「Pチャンはこれから残業?」

P「うん、そうだよ」

みく「そつか……それ、みくのせい、かな……みくがリティクいっぱい出しちゃつたから……その後始末だよね」

P「いや、違うよただの残業さ」

本当はみくの言うとおりリティクがいっぱい出たのでその後始末、しかし前川Pは担

当アイドルを傷つけたくなかつたので、優しい嘘をついたのだ。

みく「違う？…… Pちゃんは、優しいね♪うん、そうだよね、落ち込んでばつかじやダメ！みく、絶対に次の仕事で挽回するモンっ！」

P「うん！その意気だよ！」

みく「そうと決まれば、うかうかしてられないにや！Pちゃん、みくは今夜大忙しだから、早めに失礼するね！今度ゆつくり、反省会しよ！」

P「うん、わかつた」

みく「……夜ご飯を食べたら、寮の近所の公園で、秘密の猛特訓にや……」
みくがなにかぶつぶつとつぶやいている。

P「どうしたんだみく？なにをぶつぶつと……」

みく「あ、Pちゃん！ううん、何でもないのつ！こつちの話！」

P「お、おおうそーか」

みく「じゃあ、Pちゃんも体に氣をつけてっ！みくのせいで病気になつたりしたら、化け猫になつて出てくるからにやー！ばいばい！」

P「おう……ばいばい……寮の近所の公園か……」

そして、その夜公園では

みく「孤独さを隠した笑顔で」…… うーん、このト書き…… どんな表情で演じ

れば……ネコチャン、アナタならわかる?」

P「うーん、僕にもわからないにや」

みく「……つて、Pチャン!」

P「よつ!」

みく「ど、どうしてここに……」

P「みくこそ、どうしてここにいるんだ?」

みく「いや、その、みくは……夜のお散步にや! ホラ、みくつて夜行性だから! 公園で夕涼みでもしようかと!」

P「わざわざ台本持つてか? 秘密の特訓をしてたんだろう」

みく「バレちゃったね。やっぱPチャンは何でもお見通しなんだね……。そういうの……実は秘密の特訓中だったの」

P「やつぱり、そだつたのか」

みく「でも、Pちゃんところで逢えたのも、なんだか運命を感じる、みたいな……まるで、月明かりが導いてくれたみたいな……」

P「み、みく? どうした?」

みく「にやにやにや! なんかキヤラにもなくロマンチックなことを言つちやつたにや! 今の言葉、聞かなかつたことにして! 今すぐ忘れてつ!」

P 「それは難しいな～今すぐ忘れるのは当分無理だ」

みく「きっと役になりきったせいで、感傷的になつちやつたの！だから、もうおしまい！明日からはいつものみくに戻るにや！」

P 「はいはい、わかつたよ？」

みく「そう、明日からは、いつものみくに戻るから…… Pちゃん、お願ひしていい？」

P 「お？なんだい？」

みく「今日は、もうちょっとだけ一緒にいてほしい…… にや」

P 「もちろん…… いいとも」

この後、二人はしばらく公園のブランコに腰を掛けた後、みくを寮まで送りプロデューサーは帰宅した。

ビール好きプロデューサーと幸福のひととき

ある日、俺の担当アイドル・高垣楓が深刻そうな顔をしてやつて來た。

楓「……あの、プロデューサー。折り入つて相談があるんです」

楓P「それは、大事なことですか……？」

楓「はい、とても大事な……私の人生がかかつたことで……」

楓P「楓さんの人生がかかつたこと？」

高垣楓の人生がかかつてるということはよほど深刻な悩みなのだろう。

楓「実は……少しだけ、アイドルをお休みさせてもらいたいんです」

楓P「な……なにか仕事に不満でも!?」

楓「いえ、お仕事に不満なんてありませんよ。毎日充実しています」

楓P「それではなぜ？」

突然アイドルをお休みさせてもらいたいと聞いたときは仕事に不満でもあるのかと思つたがそうではないみたいだつた。

楓「けれど、どうしても外せない……ううん、外したくない重要なことがあるんです。ごめんなさい……私、わがままな女ですよね」

楓 P 「いえ……そんなことはないですが、でも、その外せない重要なこととはなんですか？」

楓 「知つてますか？もうすぐ開かれる、七日間連続のビールフェスティバル……。私、高垣楓は、どうしてもそれに毎日参加したいんです」

楓 P 「は？」

俺は一瞬、頭が真っ白になつた。なにか深刻な悩みとばかり思つていたのでビールフェスティバルに参加したいと言われたときは拍子抜けしてしまつた。

楓 「ふふつ。アイドルをお休みというのは、そういうことですよ。一週間連続のオフだなんて、スケジュール調整が大変ですものね」

楓 P 「まあ……そうですね」

楓 「だからここ最近、お酒をなるべく我慢して、どんどん仕事をこなすようにしていたんですよ。……それで……いかがでしようか？」

どうりで最近、楓さんからの誘いがなかつたのはそのためだつたのか。大好きなお酒を我慢して仕事をこなしていた楓さんにご褒美としてOKしておくか。

楓 P 「わかりました……OKですよ」

楓 「OKですか？ありがとうございます、プロデューサー。私は……幸せです。このオフでビールを飲んで、羽根がのびる気分を味わつてきます」

楓 P 「はい……しつかり味わつてきてくださいね♪」

そしてビールフェスティバル当日、俺は楓さんと一緒に会場へ到着し、席についていた。

楓「乾杯っ。ふふっ、ドイツビールのお祭りですし、あちらの流儀でしましようか。オアンス、ツヴァイア、ドライ、ズツファ！プロースト！ふふっ」

ドイツの流儀で乾杯した後、楓さんは喉を鳴らしながらおいしそうにビールを飲んだ。

楓「……はあ、美味しい。やつぱり来てよかつた……。たくさんのひとが、笑顔でビールを楽しんでいる空間……幸せそのものですね」

楓 P 「はい……そうですね……」

楓「でも、いいんですか、プロデューサー。お忙しいのに、つきあつていただいて……」

ビール P 「ええ、構いませんよ……ちゃんとそこらへんは調整していますし、それに私も、ビールは好きですし……」

実はこのことで楓プロデューサーはちひろさんと常務にみつちり叱られたのである。なので楓は気付いていないが楓プロデューサーは若干テンションが低いのである。

楓「私、今日は容赦なく、とことん飲む覚悟ですよ」

楓 P 「あはは、いつだってとここん楽しんでいるじゃないですか」

楓 「うふふつ、確かにいつだってとここん楽しんでいますけど。いまさら、断りを入れる仲でもないですね。それじゃあ、遠慮なく♪」

楓 P 「ええ、どうぞどうぞ♪」

楓 「金色、茶色、琥珀色。淡い白に、深い黒。ビールって、色とりどりで、それぞれに個性的。そして、アイドルのように人の心を慰めて……」

楓 「プロデューサーが仕込む理想のビールは、どんな味がするんでしょうね。私も、少しでもその理想に近づけたら……」けど、今は未来の味よりも、目の前にあるビールとおつまみを味わうときですね♪

楓 P 「はい♪ そうですね♪」

楓 「ふたりで最高のひとときを過ごしましよう」

頑張り屋プロデューサーとフォスマーティス

俺は先輩プロデューサーと外まわりの仕事を終えて事務所に戻ると自分の担当アイドルがいた。

美波「お疲れさまです、プロデューサーさんっ。今日もお忙しそうですね。無理してませんか？頑張りすぎは禁物ですよ」

美波P「ああ、わかつてはいるんだけどな〜」

美波「私のために頑張つてくださっているのは、知っていますけど、適度な息抜きも必要ですからね。メリハリが肝心です♪」

美波「オフはゆっくりと、忙しい日々を忘れられるような……たとえば、海外へ旅行したり……なんて。さすがに急すぎました？」

美波の提案を聞いて俺はここぞとばかりに次の仕事説明をした。

美波P「そういえば、次の仕事は旅行雑誌の撮影があるんだ」

美波「へつ？次の仕事、旅行雑誌の撮影なんですか？」

美波P「ああ、ここが撮影場所だ」

美波「撮影場所は……ギリシャのサントリー二島？わあ、海外口ケなんですね！」

美波「うん……海外での口ヶなんだよ♪」

美波「海外での口ヶかあ。うふふ、楽しみ♪でもその前に、現地のことしつかり予習しなくつちゃ！歴史や文化、簡単な挨拶とか」

それを聞いて俺は美波らしいなと思っていると美波が

美波「あ、もちろんプロデューサーさんも予習されますよね？でも、お忙しそうですしちゃ…… そうだ！私にお手伝いさせてくださいっ」

美波P「な……何を？」

美波「短いおさらいで済むように、次のオフまでに特訓ノートを作つておきますから！それを使って一緒に、勉強会をしましょう♪」

美波P「お……おう」

そして数日後、俺と美波は事務所の近くにあるカフェで勉強会をしていた。しかし今まで女性と勉強会をしたことのない俺はずつと緊張しつぱなしだった。

美波「次はこつち……あ、よそ見はダメですよ？見づらいようなら、もつと近づいてください。せつかくまとめたんですからっ」

美波「い……いやしかし……」

美波「忙しいプロデューサーさんでも短時間で覚えられるように、頑張つちゃいました。我ながら上手にまとめられたと思います♪」

たしかにノートをよく見るとものすごく上手にまとめられていた。

美波「今回お仕事で行くサントリリー島は、エーゲ海で最も美しい島といわれていて……美しい街並みが、楽園のよう、ですって……」

俺にとつては今のこの状況が楽園のようです。

美波「ああっ、楽しみ……つい思いを馳せちゃいますね。でも、素敵な場所に行けるとはいえ、お仕事だから気を引き締めないと！」

美波P「まあ、たしかにそうだな」

美波「でも……やつぱり、ソワソワしちゃいます。美しい風景での撮影も楽しみですけど、オフの時間もそれたら嬉しいですね♪」

美波P「うん、とれたらいいな♪」

美波「プロデューサーさん、もし早めにお仕事が終わつたら、一緒に島を巡りませんか？忙しい日々を忘れて、ゆっくりしましようよ♪」

美波P「ああ！もちろんさ！」

それつてつまりデートの約束つてことでいいのかとプロデューサーながらそんなことを期待してしまつた。

美波「ふふつ、そうと決まつたら、早速、勉強を再開しましよう。美波先生が、ビシツ

と指導してあげますからっ！」